

懐かしい未来新聞

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容

・若手職員研修会開催
・複線人生のすゝめ
・滋賀県再犯防止担当者会議
・重層物語スィートメモリーズ

私を生かして地域を活かす

地域共生社会づくりを自分の業務と重ねながら、何ができるかを考え、アクションが起これる市役所と社会福祉協議会の若手人材の育成を目的に、7月8日、9日にあいこう市民ホール展示室にて研修会を開催しました。

講師として、やさしいまちづくり総合研究所より中西大輔さん、前神有里さんをお招きし、基礎編、応用編と、2日間に渡り行いました。

若手職員研修会開催

参加者からは「役割分担からではなくやってみることから始める」「課題解決志向ではなく、市民と地域づくりのフラットな関係作り」「権限は連携するために使うもの」「対話によって視点を転換、拡大」「競争する関係性ではなく応援する関係性が大切」など、印象的だったキーワードが聞かれました。

このような若手職員の思いが活かされるように、共創（ともに新しい価値をつくっていくこと）が起きやすく、挑戦しやすい市役所づくりを努めていきましょう。

基礎編（やれそうなこと・やってみたいこと）

- ・ABCの二分法ではなく、Cもあるといった三分法的な考え方
- ・朝の数分の雑談の実践（雑談のなかの福祉を見出す）
- ・他課が何をやっているかの理解 ・知識を増やす
- ・先入観にとらわれず動く ・自分のウェルビーイングを考える
- ・自身の好き嫌いを書き出し自分の開示、自分の持ち味を知る
- ・寛容さと多様性を持って地域に関わる ・人となつながら
- ・計画的偶発性（予期せぬ偶然の出来事に柔軟に対応できることがキャリアアップにつながる）を意識する ・現場での実践（現状と役所の理想の乖離を知る）
- ・自分の趣味、特技を職場内に活かしていく
- ・前向き、プラス思考で一歩進みたい
- ・自分に嘘をつかずにこれからの人生を考える

7月8日 67名

雑談大事

ゆるふわで

応用編（市役所力を強化するには）

- ・なんでも話し、相談できる関係をつくり、相談したら結果を報告する
- ・課を越えてつながりあうこと、連携すること
- ・市民の視点で市役所をみる・対話をして視点を広げる（市民とも対話）
- ・できることにとらわれず、したいこと、なりたいたいことを共有する
- ・排除しない関係性 ・多様な人材を認める機会や場づくり
- ・割り算の仕事ではなく、足し算掛け算の仕事
- ・市役所だけではできないことを理解する
- ・個人のもつ特技、趣味を共有し活かす

7月9日 29名

アラソワナイ
タタカワナイ
キソワナイ

受講者の声を集めました！

対話

ギャルマインドとは、自分の好きなことを貫くポジティブな考え方、Z世代若者用語

複線人生のすゝめ

1番、キャッチャー、武孝 国スポ・障スポ推進室

ぶこう
武孝 直子さん



周りから多趣味だって言われる。単純に興味に向く先が多いだけか、飽き性なだけだと思う。そんな私が一番長くやり続けているのが、ソフトボール。

スポーツが大好きな家庭に生まれて、高校からソフトボールを始めた。振り返ってみると、ソフトボールとの向き合い方は、人生そのものみたいに多彩に変化してきた。

父をまねてボールを投げていた頃、スピードに磨きをかけ勝負にこだわった青春、大学の先輩にしがられてボールに触れなかった時期、再会した仲間たちとチームを結成して全国大会で準優勝を勝ち取った瞬間。

最近では、自分のファインプレーより、仲間のファインプレーの方がずっと嬉しい。チームワークが大切なのは、ソフトボールも仕事も一緒。

私はヒットを打って、チームに動きをつけたい。ピンチの時は、みんなのほうを向いて声を出す。

「競うより分かち合う」それが今の向き合い方かもしれません。

滋賀県再犯防止担当者会議

甲賀市の取り組みを報告

7月16日

滋賀県庁において、更生保護に関わる国機関、関係団体、県職員、県内市町職員等35名が会し、更生保護を必要とする社会情勢の認識と再犯防止を推進する取組事例を共有する場が設けられました。この担当者会議の開催は、滋賀県の初の試みです。大津地方検察庁、保護司会代表、県庁の報告に並び、県内市町の代表として、本市の取り組み「地域共生社会の実現に向けた地域づくり」と題し、中井浩喜係長が報告を行いました。



県庁7階で報告している様子

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

重層物語

スウィート・メモリーズ

休日の午前十時。

団地内にクラクションが鳴り響き、半年ぶりに帰ってきた無言の家主を乗せて、静かに霊柩車が出発した。

昨日の朝、病院で亡くなったのは隣に住む七〇代の女性だ。特に親密な関係ではなく、申し訳ないが彼女の訃報は遠い国で亡くなった人のニュースに似ている。年代が違ふ、生活のリズムが違ふ、世話になったという記憶もほとんどない。私と彼女との関係において、共通の思い出話も本来は一つも無いはずだった。

そういった前提から考えると、早起きして身なりを整え、呼ばれもしないのに親族に紛れて霊柩車を見送る私の行動は、いささか理解しがたいものがあるだろう。それを証拠に、クロセットの奥から喪服を引っ張り出す背中を、妻と娘は怪訝そうな顔をして眺めていた。

手を合わせて見送る心境は、写真に例えるならセピア色に近いのだが、『哀愁』と言ってしまえば美しすぎる。そこには、少しばかり私を不機嫌にさせるものがあった。

彼女ひとりの死は、この先の自分の暮らしに具体的な影響を及ぼすことはないだろう。それなのに、彼女を喪したことが、ひとりの人間が亡くなったこと以上の気味の悪い喪失感をもって私をつらたえさせるのだ。

それもこれも、私の隣で天を仰ぎながら必死に涙をこらえている民生委員の突拍子もない企てから始まった。あの日、民生委員に相談さえしなければ、私は住み慣れたまちで市役所職員として、無難で平穩な日々を過ごしていたにちがいない。

一人暮らしをする彼女宅から、話し声が聞こえ始めたのは、たしか昨年の梅雨の頃。雨はほとんど降らず、異様に湿度だけが高い六月だった。

二十三日過ぎ、書斎の椅子に腰かけて窓を開けた。この時間ともなれば湿った風でも、ある程度の心地良さが感じられる。読みかけの本を開いて、少しずつ物語の中へ入ってゆこうとした時、隣家の二階にある小窓から話し声が聞こえてきた。

「そんなところに突っ立って、いつ帰って来たんですか。驚かせんといってください。もう遅い時間ですから、先にお風呂入ってしめてください」

「……」

「あんたもこんな遅くまでどこ行ってたん。明日学校あるんやろ」

「……」

「ちょっと、テレビついたままやんかあ」

「……」

はて、一人暮らしのはずだが。

はじめの頃は、娘さんか誰かが帰省しているのだろと大して気に留めていなかった。しかし、それは毎晩続き、同じ時刻に、同じセリフが繰り返される。隣に住む彼女だけがいつも話しかけているが、一度だって返答の声は聞こえていない。隣家の二階には居ないはずの誰かが居て、彼女はいつも、それに驚かされている。

(認知症ってやつか?)

悪気があつてのことではないと察しつつも、時間が時間だけに、寝つくかどうかという晩には、「またか……」とげんなりさせられる。そんな時は、妙に粘着質のある声に聞こえて、明日(こそ)と云ってやろうなと思うのだった。それでも朝の出動時に、腰をさすり背伸

びしながら洗濯物を引っかける彼女を見ると、まあ次にするかと、怒りを収めてしまう。

「昔はねえ、物干し竿一本じゃ足りなかったんよ」

「……はあ、そうですか」

私に話しかけているのか独り言かの判別すらつかない。まあ、とにかく。暮らしていれば、ささいな不幸は付きもので、これくらいのが迷惑をこらわしたくらいが、かえって大きな災いもなくやつていけそうな気さえしてゐる。

しかし、そのような小さな不満でさえも放置することを許さない、解決をめざす態度をヨシとする向きが現代の空気感というものだろう。

「毎晩毎晩あの調子で、あの子も気が散って仕方ないって怒ってるわ。それにあの耳につく神経質な声でしょう。どうにかしてもうってよ」

「窓を開けなきゃいいじゃないか」

「あなた今月の電気代知ってる? 窓を開ければ涼しい日だってあるんだから。何もこつちばかりが我慢することないでしょう」

「朝出かける時は、ちゃんと挨拶もして、いつもと変わらないんだ」

「夜の話をしてるの。何も怒鳴り込めって言うてないんだから。直接言えないなら、地域の人か誰かに相談すればいいじゃない」

「地域の人って言うてもなあ」

「だったら福祉課に聞いたらどうなの。同じ市役所なんだから」

自分で言うのもなんだが、私は結構丸め込まれてしまう。本音を言えば、受験生の娘にも、点数を稼ぐための勉強よりも、こういつた不満を寛容に受けとめる態度を学んでほしいのだが、そんな説教を垂れたところで冗談にもならない。逆に、太ことにしたくないだけとお叱りを受けるのがオチだ。

とはいえ、福祉課でプライベートな相談をするのも気が引けるし、地域で相談に乗ってもらえる人を探すしかない。そこで思い当たったのが、家の斜め向かいに住んでいた松田民生委員だ。

私は、隣人の奇妙な独り言も、そのうちなくなるだろうと甘く考えていたところもあり、相談に対する理想的な返答といえは、「個人情報にうるさいこ時世なので、他人様の暮らしには立ち入れない」というものだった。

隣人の独り言は解決しなくても、「地域の人に相談した」という事実は残る。家族にも説明がつくというものだ。

しかし、私の勝手都合な考えは、もつとも打ち砕かれた。困ったことに松田さんはかなり熱心な民生委員で、しかも認知症に関する研修会に参加したばかりだったらしく、もつ自信たつぷりに、困りごとの解決に向けた作戦を披露してくれた。

それは、私にとって、実にありえない作戦だった。

